

# つなみ

被災地の子どもたちの作文集

完全版 森健 [編]



18万部のベストセラー『つなみ』完全版

岩手、宮城、福島の子どもたち  
総勢115人の感動の作文集

文藝春秋刊 定価(本体1300円+税)

大宅壮一ノンフィクション賞受賞

特別紀行

## 「『つなみ』の子どもたち」 スイスを行く

森健

「ハイジー！」  
陽気な声が高い丘に響く。見晴らしのいい急勾配の小道。美しい風景を前に子どもたちは、はしゃぎつばなした。たしかにハイジがいてもおかしくない風景だった。空は青く広がって、遠くにはアイガーやユングフラウなどアルプスの名峰がそびえている。スイスと雄大な自然は東北の家族たちを魅了していた。  
二〇一二年三月末、筆者は東北の家族九組二十五人とスイスに滞在していた。子どもたちの春休みを利用して、アルプスの山々に登ったり、ハイキングしたりという六泊八日のツアー。主催はスイス インターナショナル エアラインズ(以下、スイスエア)と、その社員ベアート・ブランドラーさんがこのツアーのためにつくった非営利団体ウイングス・フォー・ジャパン。ツアーについては「ツナミ、ケア・フライト」という副題がついていた。「津波で被害を受けた東北の人たちをスイス

に招待したい」と思っているんです。ご協力いただけませんか？」  
スイスエア日本支社長岡部昇さんから文藝春秋に打診があったのは前年秋のこと。震災に心を痛めた岡部さんとベアートさんは、直後から東北支援を模索していた。ベアートさんは長く日本線に従事するチーフ・クルーで、妻も日本人。日本に対する思い入れは人一倍あった。そんな中、作文集「つなみ」が岡部さんの目にとまる。子どもたちによる震災体験の作文に胸を打たれた彼は親交のあった文春の人間に連絡。そこから話が回り始めた。

作文集の子どもは八十五名。その中から親子で二十〜三十人をスイスに招待したいというのがある。誰さんらの意向だった。筆者にも連絡があり、誰に声をかけようかと相談を受けた。真っ先に頭に浮かんだのは作文集の取材

の後まわり足しを運び、単行本「つなみ」

の啓史君に「走れ！」と怒鳴られて走り継ぎ、一命をとりとめた。その次男は学校から自宅謹慎を命じられたこともある金髪長髪の十七歳。スイスなんていいよと突っ張る次男を「将来のためだから」と無理やり引っ張って参加していた。美香さんはスイス滞在中に自らを「ダイアナ」と名乗って人気を得ることになる。

東京駅ではどの家族もやや堅い面持ちだった。お互いのことを知らず、移動の疲れもあつたためだ。

例外は釜石市の洞人家と大槌町の八幡家で、両家の子どもたちは新幹線のホームから騒がしかった。

「塾長こっちはやないの」  
「こちら優人！ 勝手に行くな」  
両家は震災直後の避難所時代に知り合い、以後八幡光徳さんが経営する塾に娘の千代さん、洞人家の留伊さん(小四)、優人君(小二)が通うことで、交流が深まっていた。光徳さんは「塾長」という愛称で呼ばれていた。

成田空港でレストランに入ると、早くも仲の良いおしゃべりが始まった。その一組が、大槌町の黒沢家と気仙沼市の佐藤家だった。黒沢家は中三の菜緒佳さん、中一の知佳さん、佐藤家は小四の菜摘さんと小一の春菜ちゃん。学年には差があるが、娘二人と母とい

う三人での参加、姉妹に兄がいることなど、両家族には共通項も多く、女子会のような雰囲気を感じた。

宿舎までの二十分の坂道  
チューリップと空港での大変な歓迎にはみんなが目を丸くした。だが、そこが長かった。スイスが滞滞に巻き込まれ二時間の行程が利用して参加していただくことになった。鉄道やバスはベアートさんが交渉すると、通行バスの無償提供されるという厚意にも恵まれた。準備は万端。いよいよ出発だった。

「すみませーん。三陸道が事故渋滞で新幹線一本乗り遅れました」  
こちらが東京駅に向かう途中、そう電話をかけてきたのは石巻市の鈴木美香さんだった。遅れたのは悠史君(小五)と啓史君(高二)。焦らなくて大丈夫です、と応じたものの、美香さんらしい慌ただしいハプニングとも思え、微笑ましくもあった。

子どもが六人、うち五人が男の子というおそろしく手が掛かる家族をもつ美香さんは情に厚く、ユーモアに溢れ、気風もよい大黒柱のような母親だった。震災では迫りくる津波から逃げる際、諦めようとしたところで次男

と平塚兄弟はみゆきさんの母、彼らにとっての祖母が面倒を見ていたが、震災で祖母は帰らぬ人。そこでみゆきさんの家族が二人を里親として引き取った。二人が小さい時から遊んで来たのは朝八時。時差ボケで疲れが残っていたが、みな意気軒昂のようだった。この日の目的地はアルプスの人気観光地グリンデルワルト。朝食後、サンドイッチと水のセットをもらって出発だった。

宿からバス停までの道の長さが不平等や悲鳴も聞こえるが予想された、歩きに平や芝も少なく懸念は晴れていた。誰もが目の前の壮大な自然を堪能していたからだ。言うまでもなく、もつとも興奮しているのは子どもたちだった。

「あつ！ 空飛んでる人がいる！」  
「おれも乗ってー！」  
「えー、わたしやだー」  
空に揺れるパラグライダーを見て、大声を出していたのは女川町出身の平塚俊彦君(中三)。前足の平塚俊彦君は操作に慣れず、目もつぶして、そこから転落。足が雪に埋まると、真入君(小五)、二人のいとこで石巻市から来た佐々木莉奈ちゃん(小三)だった。

三人は坂道を行きつ戻りつしたりとせわしなく歩いては、ほかの家族に話しかけていた。「もうあれですけど、みなさんに迷惑かけなければいいんですけど……」  
保護者である佐々木みゆきさんはやや呆れたような顔で三人の動きを見ていた。もともと

で「できるんす」  
初日はそんな思いを伝える時間的な余裕もなく、多くはベッドへ倒れこんでいた。翌朝朝食を集合したのは朝八時。時差ボケで疲れが残っていたが、みな意気軒昂のようだった。この日の目的地はアルプスの人気観光地グリンデルワルト。朝食後、サンドイッチと水のセットをもらって出発だった。

宿からバス停までの道の長さが不平等や悲鳴も聞こえるが予想された、歩きに平や芝も少なく懸念は晴れていた。誰もが目の前の壮大な自然を堪能していたからだ。言うまでもなく、もつとも興奮しているのは子どもたちだった。

「あつ！ 空飛んでる人がいる！」  
「おれも乗ってー！」  
「えー、わたしやだー」  
空に揺れるパラグライダーを見て、大声を出していたのは女川町出身の平塚俊彦君(中三)。前足の平塚俊彦君は操作に慣れず、目もつぶして、そこから転落。足が雪に埋まると、真入君(小五)、二人のいとこで石巻市から来た佐々木莉奈ちゃん(小三)だった。

三人は坂道を行きつ戻りつしたりとせわしなく歩いては、ほかの家族に話しかけていた。「もうあれですけど、みなさんに迷惑かけなければいいんですけど……」  
保護者である佐々木みゆきさんはやや呆れたような顔で三人の動きを見ていた。もともと

と平塚兄弟はみゆきさんの母、彼らにとっての祖母が面倒を見ていたが、震災で祖母は帰らぬ人。そこでみゆきさんの家族が二人を里親として引き取った。二人が小さい時から遊んで来たのは朝八時。時差ボケで疲れが残っていたが、みな意気軒昂のようだった。この日の目的地はアルプスの人気観光地グリンデルワルト。朝食後、サンドイッチと水のセットをもらって出発だった。

宿からバス停までの道の長さが不平等や悲鳴も聞こえるが予想された、歩きに平や芝も少なく懸念は晴れていた。誰もが目の前の壮大な自然を堪能していたからだ。言うまでもなく、もつとも興奮しているのは子どもたちだった。

「あつ！ 空飛んでる人がいる！」  
「おれも乗ってー！」  
「えー、わたしやだー」  
空に揺れるパラグライダーを見て、大声を出していたのは女川町出身の平塚俊彦君(中三)。前足の平塚俊彦君は操作に慣れず、目もつぶして、そこから転落。足が雪に埋まると、真入君(小五)、二人のいとこで石巻市から来た佐々木莉奈ちゃん(小三)だった。

三人は坂道を行きつ戻りつしたりとせわしなく歩いては、ほかの家族に話しかけていた。「もうあれですけど、みなさんに迷惑かけなければいいんですけど……」  
保護者である佐々木みゆきさんはやや呆れたような顔で三人の動きを見ていた。もともと

「ちよーキモい、キモい」  
「あ、あつちのほうが旦那だだよ。あつち行こう！」  
それまで交わっていなかったグループが、いつのまにか自然に仲良しグループになっていた。元気な女子は絞った靴下を振り回し、男子はそりに乗って乗っていった大人を捕まえては「すりー」と文句を言っていた。言うまでもなく、もつとも興奮しているのは子どもたちだった。

「あつ！ 空飛んでる人がいる！」  
「おれも乗ってー！」  
「えー、わたしやだー」  
空に揺れるパラグライダーを見て、大声を出していたのは女川町出身の平塚俊彦君(中三)。前足の平塚俊彦君は操作に慣れず、目もつぶして、そこから転落。足が雪に埋まると、真入君(小五)、二人のいとこで石巻市から来た佐々木莉奈ちゃん(小三)だった。

三人は坂道を行きつ戻りつしたりとせわしなく歩いては、ほかの家族に話しかけていた。「もうあれですけど、みなさんに迷惑かけなければいいんですけど……」  
保護者である佐々木みゆきさんはやや呆れたような顔で三人の動きを見ていた。もともと

「ちよーキモい、キモい」  
「あ、あつちのほうが旦那だだよ。あつち行こう！」  
それまで交わっていなかったグループが、いつのまにか自然に仲良しグループになっていた。元気な女子は絞った靴下を振り回し、男子はそりに乗って乗っていった大人を捕まえては「すりー」と文句を言っていた。言うまでもなく、もつとも興奮しているのは子どもたちだった。

「あつ！ 空飛んでる人がいる！」  
「おれも乗ってー！」  
「えー、わたしやだー」  
空に揺れるパラグライダーを見て、大声を出していたのは女川町出身の平塚俊彦君(中三)。前足の平塚俊彦君は操作に慣れず、目もつぶして、そこから転落。足が雪に埋まると、真入君(小五)、二人のいとこで石巻市から来た佐々木莉奈ちゃん(小三)だった。

三人は坂道を行きつ戻りつしたりとせわしなく歩いては、ほかの家族に話しかけていた。「もうあれですけど、みなさんに迷惑かけなければいいんですけど……」  
保護者である佐々木みゆきさんはやや呆れたような顔で三人の動きを見ていた。もともと

「ちよーキモい、キモい」  
「あ、あつちのほうが旦那だだよ。あつち行こう！」  
それまで交わっていなかったグループが、いつのまにか自然に仲良しグループになっていた。元気な女子は絞った靴下を振り回し、男子はそりに乗って乗っていった大人を捕まえては「すりー」と文句を言っていた。言うまでもなく、もつとも興奮しているのは子どもたちだった。

「あつ！ 空飛んでる人がいる！」  
「おれも乗ってー！」  
「えー、わたしやだー」  
空に揺れるパラグライダーを見て、大声を出していたのは女川町出身の平塚俊彦君(中三)。前足の平塚俊彦君は操作に慣れず、目もつぶして、そこから転落。足が雪に埋まると、真入君(小五)、二人のいとこで石巻市から来た佐々木莉奈ちゃん(小三)だった。

三人は坂道を行きつ戻りつしたりとせわしなく歩いては、ほかの家族に話しかけていた。「もうあれですけど、みなさんに迷惑かけなければいいんですけど……」  
保護者である佐々木みゆきさんはやや呆れたような顔で三人の動きを見ていた。もともと

「ちよーキモい、キモい」  
「あ、あつちのほうが旦那だだよ。あつち行こう！」  
それまで交わっていなかったグループが、いつのまにか自然に仲良しグループになっていた。元気な女子は絞った靴下を振り回し、男子はそりに乗って乗っていった大人を捕まえては「すりー」と文句を言っていた。言うまでもなく、もつとも興奮しているのは子どもたちだった。

「あつ！ 空飛んでる人がいる！」  
「おれも乗ってー！」  
「えー、わたしやだー」  
空に揺れるパラグライダーを見て、大声を出していたのは女川町出身の平塚俊彦君(中三)。前足の平塚俊彦君は操作に慣れず、目もつぶして、そこから転落。足が雪に埋まると、真入君(小五)、二人のいとこで石巻市から来た佐々木莉奈ちゃん(小三)だった。

三人は坂道を行きつ戻りつしたりとせわしなく歩いては、ほかの家族に話しかけていた。「もうあれですけど、みなさんに迷惑かけなければいいんですけど……」  
保護者である佐々木みゆきさんはやや呆れたような顔で三人の動きを見ていた。もともと

「ちよーキモい、キモい」  
「あ、あつちのほうが旦那だだよ。あつち行こう！」  
それまで交わっていなかったグループが、いつのまにか自然に仲良しグループになっていた。元気な女子は絞った靴下を振り回し、男子はそりに乗って乗っていった大人を捕まえては「すりー」と文句を言っていた。言うまでもなく、もつとも興奮しているのは子どもたちだった。

「あつ！ 空飛んでる人がいる！」  
「おれも乗ってー！」  
「えー、わたしやだー」  
空に揺れるパラグライダーを見て、大声を出していたのは女川町出身の平塚俊彦君(中三)。前足の平塚俊彦君は操作に慣れず、目もつぶして、そこから転落。足が雪に埋まると、真入君(小五)、二人のいとこで石巻市から来た佐々木莉奈ちゃん(小三)だった。

三人は坂道を行きつ戻りつしたりとせわしなく歩いては、ほかの家族に話しかけていた。「もうあれですけど、みなさんに迷惑かけなければいいんですけど……」  
保護者である佐々木みゆきさんはやや呆れたような顔で三人の動きを見ていた。もともと

「ちよーキモい、キモい」  
「あ、あつちのほうが旦那だだよ。あつち行こう！」  
それまで交わっていなかったグループが、いつのまにか自然に仲良しグループになっていた。元気な女子は絞った靴下を振り回し、男子はそりに乗って乗っていった大人を捕まえては「すりー」と文句を言っていた。言うまでもなく、もつとも興奮しているのは子どもたちだった。

「あつ！ 空飛んでる人がいる！」  
「おれも乗ってー！」  
「えー、わたしやだー」  
空に揺れるパラグライダーを見て、大声を出していたのは女川町出身の平塚俊彦君(中三)。前足の平塚俊彦君は操作に慣れず、目もつぶして、そこから転落。足が雪に埋まると、真入君(小五)、二人のいとこで石巻市から来た佐々木莉奈ちゃん(小三)だった。

三人は坂道を行きつ戻りつしたりとせわしなく歩いては、ほかの家族に話しかけていた。「もうあれですけど、みなさんに迷惑かけなければいいんですけど……」  
保護者である佐々木みゆきさんはやや呆れたような顔で三人の動きを見ていた。もともと

「ちよーキモい、キモい」  
「あ、あつちのほうが旦那だだよ。あつち行こう！」  
それまで交わっていなかったグループが、いつのまにか自然に仲良しグループになっていた。元気な女子は絞った靴下を振り回し、男子はそりに乗って乗っていった大人を捕まえては「すりー」と文句を言っていた。言うまでもなく、もつとも興奮しているのは子どもたちだった。

「あつ！ 空飛んでる人がいる！」  
「おれも乗ってー！」  
「えー、わたしやだー」  
空に揺れるパラグライダーを見て、大声を出していたのは女川町出身の平塚俊彦君(中三)。前足の平塚俊彦君は操作に慣れず、目もつぶして、そこから転落。足が雪に埋まると、真入君(小五)、二人のいとこで石巻市から来た佐々木莉奈ちゃん(小三)だった。

三人は坂道を行きつ戻りつしたりとせわしなく歩いては、ほかの家族に話しかけていた。「もうあれですけど、みなさんに迷惑かけなければいいんですけど……」  
保護者である佐々木みゆきさんはやや呆れたような顔で三人の動きを見ていた。もともと

「ちよーキモい、キモい」  
「あ、あつちのほうが旦那だだよ。あつち行こう！」  
それまで交わっていなかったグループが、いつのまにか自然に仲良しグループになっていた。元気な女子は絞った靴下を振り回し、男子はそりに乗って乗っていった大人を捕まえては「すりー」と文句を言っていた。言うまでもなく、もつとも興奮しているのは子どもたちだった。

「あつ！ 空飛んでる人がいる！」  
「おれも乗ってー！」  
「えー、わたしやだー」  
空に揺れるパラグライダーを見て、大声を出していたのは女川町出身の平塚俊彦君(中三)。前足の平塚俊彦君は操作に慣れず、目もつぶして、そこから転落。足が雪に埋まると、真入君(小五)、二人のいとこで石巻市から来た佐々木莉奈ちゃん(小三)だった。

三人は坂道を行きつ戻りつしたりとせわしなく歩いては、ほかの家族に話しかけていた。「もうあれですけど、みなさんに迷惑かけなければいいんですけど……」  
保護者である佐々木みゆきさんはやや呆れたような顔で三人の動きを見ていた。もともと

「ちよーキモい、キモい」  
「あ、あつちのほうが旦那だだよ。あつち行こう！」  
それまで交わっていなかったグループが、いつのまにか自然に仲良しグループになっていた。元気な女子は絞った靴下を振り回し、男子はそりに乗って乗っていった大人を捕まえては「すりー」と文句を言っていた。言うまでもなく、もつとも興奮しているのは子どもたちだった。

「あつ！ 空飛んでる人がいる！」  
「おれも乗ってー！」  
「えー、わたしやだー」  
空に揺れるパラグライダーを見て、大声を出していたのは女川町出身の平塚俊彦君(中三)。前足の平塚俊彦君は操作に慣れず、目もつぶして、そこから転落。足が雪に埋まると、真入君(小五)、二人のいとこで石巻市から来た佐々木莉奈ちゃん(小三)だった。

三人は坂道を行きつ戻りつしたりとせわしなく歩いては、ほかの家族に話しかけていた。「もうあれですけど、みなさんに迷惑かけなければいいんですけど……」  
保護者である佐々木みゆきさんはやや呆れたような顔で三人の動きを見ていた。もともと

「ちよーキモい、キモい」  
「あ、あつちのほうが旦那だだよ。あつち行こう！」  
それまで交わっていなかったグループが、いつのまにか自然に仲良しグループになっていた。元気な女子は絞った靴下を振り回し、男子はそりに乗って乗っていった大人を捕まえては「すりー」と文句を言っていた。言うまでもなく、もつとも興奮しているのは子どもたちだった。

「あつ！ 空飛んでる人がいる！」  
「おれも乗ってー！」  
「えー、わたしやだー」  
空に揺れるパラグライダーを見て、大声を出していたのは女川町出身の平塚俊彦君(中三)。前足の平塚俊彦君は操作に慣れず、目もつぶして、そこから転落。足が雪に埋まると、真入君(小五)、二人のいとこで石巻市から来た佐々木莉奈ちゃん(小三)だった。

三人は坂道を行きつ戻りつしたりとせわしなく歩いては、ほかの家族に話しかけていた。「もうあれですけど、みなさんに迷惑かけなければいいんですけど……」  
保護者である佐々木みゆきさんはやや呆れたような顔で三人の動きを見ていた。もともと

「ちよーキモい、キモい」  
「あ、あつちのほうが旦那だだよ。あつち行こう！」  
それまで交わっていなかったグループが、いつのまにか自然に仲良しグループになっていた。元気な女子は絞った靴下を振り回し、男子はそりに乗って乗っていった大人を捕まえては「すりー」と文句を言っていた。言うまでもなく、もつとも興奮しているのは子どもたちだった。

「あつ！ 空飛んでる人がいる！」  
「おれも乗ってー！」  
「えー、わたしやだー」  
空に揺れるパラグライダーを見て、大声を出していたのは女川町出身の平塚俊彦君(中三)。前足の平塚俊彦君は操作に慣れず、目もつぶして、そこから転落。足が雪に埋まると、真入君(小五)、二人のいとこで石巻市から来た佐々木莉奈ちゃん(小三)だった。

三人は坂道を行きつ戻りつしたりとせわしなく歩いては、ほかの家族に話しかけていた。「もうあれですけど、みなさんに迷惑かけなければいいんですけど……」  
保護者である佐々木みゆきさんはやや呆れたような顔で三人の動きを見ていた。もともと

「ちよーキモい、キモい」  
「あ、あつちのほうが旦那だだよ。あつち行こう！」  
それまで交わっていなかったグループが、いつのまにか自然に仲良しグループになっていた。元気な女子は絞った靴下を振り回し、男子はそりに乗って乗っていった大人を捕まえては「すりー」と文句を言っていた。言うまでもなく、もつとも興奮しているのは子どもたちだった。

「あつ！ 空飛んでる人がいる！」  
「おれも乗ってー！」  
「えー、わたしやだー」  
空に揺れるパラグライダーを見て、大声を出していたのは女川町出身の平塚俊彦君(中三)。前足の平塚俊彦君は操作に慣れず、目もつぶして、そこから転落。足が雪に埋まると、真入君(小五)、二人のいとこで石巻市から来た佐々木莉奈ちゃん(小三)だった。

三人は坂道を行きつ戻りつしたりとせわしなく歩いては、ほかの家族に話しかけていた。「もうあれですけど、みなさんに迷惑かけなければいいんですけど……」  
保護者である佐々木みゆきさんはやや呆れたような顔で三人の動きを見ていた。もともと

「ちよーキモい、キモい」  
「あ、あつちのほうが旦那だだよ。あつち行こう！」  
それまで交わっていなかったグループが、いつのまにか自然に仲良しグループになっていた。元気な女子は絞った靴下を振り回し、男子はそりに乗って乗っていった大人を捕まえては「すりー」と文句を言っていた。言うまでもなく、もつとも興奮しているのは子どもたちだった。

「あつ！ 空飛んでる人がいる！」  
「おれも乗ってー！」  
「えー、わたしやだー」  
空に揺れるパラグライダーを見て、大声を出していたのは女川町出身の平塚俊彦君(中三)。前足の平塚俊彦君は操作に慣れず、目もつぶして、そこから転落。足が雪に埋まると、真入君(小五)、二人のいとこで石巻市から来た佐々木莉奈ちゃん(小三)だった。

三人は坂道を行きつ戻りつしたりとせわしなく歩いては、ほかの家族に話しかけていた。「もうあれですけど、みなさんに迷惑かけなければいいんですけど……」  
保護者である佐々木みゆきさんはやや呆れたような顔で三人の動きを見ていた。もともと

「ちよーキモい、キモい」  
「あ、あつちのほうが旦那だだよ。あつち行こう！」  
それまで交わっていなかったグループが、いつのまにか自然に仲良しグループになっていた。元気な女子は絞った靴下を振り回し、男子はそりに乗って乗っていった大人を捕まえては「すりー」と文句を言っていた。言うまでもなく、もつとも興奮しているのは子どもたちだった。

「あつ！ 空飛んでる人がいる！」  
「おれも乗ってー！」  
「えー、わたしやだー」  
空に揺れるパラグライダーを見て、大声を出していたのは女川町出身の平塚俊彦君(中三)。前足の平塚俊彦君は操作に慣れず、目もつぶして、そこから転落。足が雪に埋まると、真入君(小五)、二人のいとこで石巻市から来た佐々木莉奈ちゃん(小三)だった。

三人は坂道を行きつ戻りつしたりとせわしなく歩いては、ほかの家族に話しかけていた。「もうあれですけど、みなさんに迷惑かけなければいいんですけど……」  
保護者である佐々木みゆきさんはやや呆れたような顔で三人の動きを見ていた。もともと

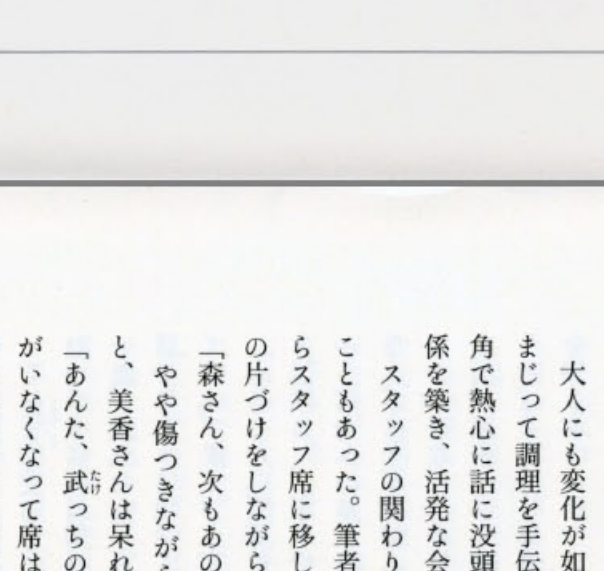
「ちよーキモい、キモい」  
「あ、あつちのほうが旦那だだよ。あつち行こう！」  
それまで交わっていなかったグループが、いつのまにか自然に仲良しグループになっていた。元気な女子は絞った靴下を振り回し、男子はそりに乗って乗っていった大人を捕まえては「すりー」と文句を言っていた。言うまでもなく、もつとも興奮しているのは子どもたちだった。

「あつ！ 空飛んでる人がいる！」  
「おれも乗ってー！」  
「えー、わたしやだー」  
空に揺れるパラグライダーを見て、大声を出していたのは女川町出身の平塚俊彦君(中三)。前足の平塚俊彦君は操作に慣れず、目もつぶして、そこから転落。足が雪に埋まると、真入君(小五)、二人のいとこで石巻市から来た佐々木莉奈ちゃん(小三)だった。

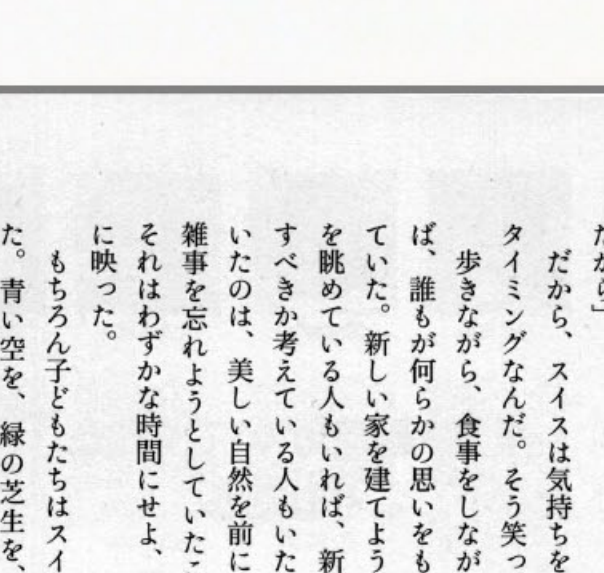
三人は坂道を行きつ戻りつしたりとせわしなく歩いては、ほかの家族に話しかけていた。「もうあれですけど、みなさんに迷惑かけなければいいんですけど……」  
保護者である佐々木みゆきさんはやや呆れたような顔で三人の動きを見ていた。もともと



あたたかな陽射しのグリンデルワルト駅にて



毎食の調理をしてくれたコックのイブさん父親と一緒に



8日間のツアーを終え、ベアートさんと固く握手